

Title	先端科学技術の社会実装をめぐる「ELSIイノベーション」の 必要性と可能性について：「倫理(E)のイノベーション」と「 法(L)のイノベーション」の相互補完性の観点から
Author(s)	中山, 敬太
Citation	年次学術大会講演要旨集, 39: 162-163
Issue Date	2024-10-26
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/19560
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載す るものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

先端科学技術の社会実装をめぐる

「ELSI イノベーション」の必要性と可能性について

－「倫理(E)のイノベーション」と「法(L)のイノベーション」の相互補完性の観点から－

○中山敬太（日本都市センター）

1. 本報告の目的と趣旨

本報告では、先端科学技術の研究開発構想段階から社会実装段階における「ELSI イノベーション」の必要性とその可能性について検討を行った。具体的には、そもそも新たな概念である「ELSI イノベーション」とは何を意味するのかを示し、当該概念を要素分解した上で特に「倫理(E)のイノベーション」と「法(L)のイノベーション」の相互補完性の観点から、「ELSI イノベーション」が創出される可能性やその必要性等について、関連する先行研究等を踏まえながら若干の考察を行い、関連する領域・分野への新たな政策的示唆を提示した内容となっている。なお、「ELSI」とは、「Ethical、Legal and Social Issues」（倫理的、法的、社会的課題）のことである。

2. 問題の所在

まず、先端科学技術の社会実装に至るプロセスにおける「ELSI イノベーション」とは一体どのような意味なのか、新たな概念でもあり、その意義や必要性等が問題となる。その上で、次に「ELSI」の中でもとりわけ「倫理(E)のイノベーション」と「法(L)のイノベーション」に焦点を当て要素分解をした際、それぞれが意味する内容と双方の相互補完性を具体的に検討し、『ELSI』を『イノベーション』する」または「『ELSI』が『イノベーション』される」メカニズムやその効果可能性の実態は明確でなく問題となる。

3. 本報告の概要

そこで、本報告では、上述した目的と趣旨を踏まえ、先端科学技術の社会実装をめぐる「ELSI イノベーション」の必要性とその可能性について検討を行う。

具体的に、例えば先端科学技術の社会実装をめぐる各々のリスクに対して、その「リスク対処への意思決定は、多様な価値観にもとづけば、ある判断が正しく別の判断が間違っているといったような絶対的な判断は成り立たない」¹とされている。また、「どのリスクを重視するかについての価値観が問題になるが、人々の間ではしばしば重視する価値観が対立する」²ことになる。この価値観の対立こそが、「倫理(E)のイノベーション」をもたらす契機となる。この点に関しては、「リスクは、決定者自身による観察(自己観察)も含めて、決定を観察する際の観点である」³とされている所以である。

また、その一方で、「リスク評価やリスク受容の用意は、心理的な問題であるだけでなく、何よりも社会的な問題である」⁴とも言われており、その上「何らかのリスクを考慮するのかそれとも考慮しないのか(またいかなる内容的・時間的地平においてそうしているのか)」について、誰があるいは何が決定を下しているのかという問いが前面に出てくることになる⁵という点を踏まえると、一種のリスクの選択という問題実態が生じていることになり、何を問題として捉え、当該問題に対していかなる制度設計をしていくか(「法(L)のイノベーション」)ということに繋がる。

本報告で具体的に取り上げる先端科学技術の社会実装をめぐる「ELSI イノベーション」に関しては、「全体社会とテクノロジーとの構造的カップリング(より精確には、きわめて個別的な社会システムと複雑なテクノロジーの部分領域とのそれ)は、(中略)数多くの、多様で、一部はコンフリクトを惹起するような効果をもたらしている」⁶とも言われているように、この「コンフリクト」により見出される可能

¹ 広瀬幸雄編(2014)『リスクガバナンスの社会心理学』ナカニシヤ出版、p.62 引用。

² 広瀬(2014)、p.14 引用。

³ ニクラス・ルーマン(2014)『リスクの社会学—ニクラス・ルーマン—』小松丈晃(訳)、新泉社、p.127 引用。

⁴ ルーマン(2014)、p.20 引用。

⁵ ルーマン(2014)、p.20 引用。

⁶ ルーマン(2014)、p.122 引用。

性が示唆される。このような内容も踏まえながら、先端科学技術の社会実装をめぐる「ELSI イノベーション」の必要性和その可能性について追究する。

謝辞

本研究は、公益財団法人上廣倫理財団令和4年度研究助成を受けた研究成果の一部である。この場をお借りして厚く御礼を申し上げる。

主な参考文献

- 科学技術振興機構・研究開発戦略センター(2021)「ELSI から RRI への展開から考える科学技術・イノベーションの変革—政策・ファンディング・研究開発の横断的取り組みの強化に向けて—」(<https://www.jst.go.jp/crds/pdf/2021/RR/CRDS-FY2021-RR-07.pdf>: 最終閲覧日 2024 年 9 月 20 日)
- 科学技術振興機構・研究開発戦略センター(2023)「科学技術・イノベーションの土壌づくりとしての ELSI/RRI—戦略的な科学技術ガバナンスの実現に向けて—」(<https://www.jst.go.jp/crds/pdf/2023/SP/CRDS-FY2023-SP-01.pdf>: 最終閲覧日 2024 年 9 月 15 日)
- 中山敬太(2022)「先端科学技術の不確実性政策における「法」と「倫理」の隣接点—不確実性マネジメントにおける「ナッジ」によるナラティブ・アプローチの観点から—」『場の科学』Vol.2, No.2
- 中山敬太(2024)「AI 技術の ELSI マネジメント上の「不確実性」と「イノベーション」のあり方に関する一考察—『倫理的不確実性』の対処から『法のイノベーション』の促進へ」『場の科学』Vol.4, No.1
- 中山敬太(2024)「化学物質リスクをめぐる法的予防措置の『標準化』に向けた新たな可能性—PFAS 問題の現状と課題を踏まえて—」『場の科学』Vol.4, No.2(近刊)
- 中山敬太(2023)「不確実性を伴うリスクに対する「ナッジ」が果たす環境法政策学上の役割—先端科学技術のリスク政策における「予防原則」と「ナッジ」の相乗効果—」『環境法政策学会誌』Vol.26
- ニクラス・ルーマン(2014)『リスクの社会学—ニクラス・ルーマン—』小松丈晃(訳)、新泉社
- 広瀬幸雄編(2014)『リスクガバナンスの社会心理学』ナカニシヤ出版